東京支部　春の講演会（2024 年 5 月 11 日）報告

来日 50 年

―ラオスと日本の架け橋となって―

NPO 法人「ラオスのこども」代表

チャンタソン・インタヴォン氏

ヴィエンチャン生まれ
お茶の水女子大学大学院修士課程修了
都立大学大学院博士課程単位習得終了
ラオスおよび日本において両国親善活動、ラオスの教育普及活動やラオス伝統織物保存・普及の中心的役割を果たしている
2020（令和２）年　秋の外国人叙勲において「旭日双光章」受章

新緑が目に眩しい 5 月の土曜、お茶大の卒業生であり、NPO 法人「ラオスのこども」代表チャンタソン・インタヴォン氏を来日 50 年の記念としてお迎えして、講演会を開催いたしました。当日は日本とラオスにおける講師の幅広いご業績の紹介とともに、会場では翻訳された本の展示、ラオスの緻密で美しい織物を使用した小物等の展示販売もあり、講師のお人柄に魅了された活気あふれる会となりました。

会場参加者　39 名、オンライン（Zoom 配信）19 名、合計 58 名の参加がありました。

【講演内容】

1　はじめに

私はお茶大の同級生、先輩、後輩に育てられたといつも思っています。日本で人や環境に恵まれた私が、自分の国（ラオス）に対して何ができるかを考えたとき、子どもの教育環境を少しで

も良くすることが大切だと思いました。

日本ではさまざまな方面で活動をさせていただきましたが、大学３年（1978 年）から外務省の方々にラオス語を教えていました。当時、外務省研修所は茗荷谷駅の前にありましたので、大学へ来てから教えに行っていました。今どこへ行っても教え子がラオス語の翻訳や通訳で活躍しているのをみると嬉しくなります。

２　ラオスの紹介

ラオスという国は内陸国で海に接していないため、ラオス人はみんな海に憧れています。

ラオスは５つの国に接しており、特にタイとは 1000 キロ近く国境を接しています。国境に近い人はタイ語を話せ、カンボジア、ベトナム、中国、それぞれの国に接したところでは、その国の言葉を話す人がいます。ミャンマーとは、ジャングルが多くて、直接接することはあまりないですが、ミャンマーにはラオスと同じ民族で同じ言葉を話す人もいます。

ラオスは海がないかわりに、中国を源とする大きなメコン川があります。メコン川はカンボジア、ベトナムを通って海に流れていきます。長さは大体 4700 キロくらいある川です。広いところは川幅が 2000 メートル以上、狭いところは何百メートルです。ラオスの首都ヴィエンチャンの海抜は 150 メートル以上あります。カンボジアは平地の国なので、ラオスとカンボジアの国境付近でメコン川は幅の広い滝になって落ちていきます。

ラオスにはいろいろな少数民族がいます。昔は 68 の民族がいるといわれていましたが、現在政府の発表では正式には 49 だそうです。少数民族には、モン族、アカ族、タイ族、ヤオ族などがいます。民族が違うと衣装が異なります。少数民族の中では刺繍の上手な人達が多いです。

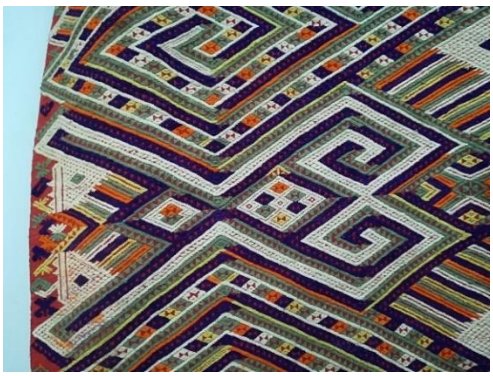
それぞれの民族で言葉が違いますので、お互いに通じないことが多いです。自分の村の中だけで住んでいて、ラオス族の人々と交流がないのでラオス語が通じない場合があります。他にはクメール系、チベット系、インド系などいろいろな人がいます。

下の左の写真はモン族の刺繍の一つです。右の刺繍はヤオ族です。ヤオ族は両面刺繍で、表裏がありません。ヤオ族の刺繍は、とても特殊な刺繍として私もほれこんで多く集めるようになりました。

今日わたしが着ているものは、タイ・ルー族の織物でつづれ織りです。日本だとつづれ織りというと爪先を研いで三角のギザギザを作りこつこつと織る人間国宝の方々の作品などがありますが、ラオスの場合は女性達が普通に織っています。

こちらの模様はライオンとゾウが一緒になった想像上の動物でラオスの守り神のようなものです。いろいろな形、色をつかって掬い織、縫い取りという言い方もします。日本の帯の織り方などに似ています。

下の方は織と刺繍が一緒になっています。左は、ベトナム国境にいるタイチェイ族。右が非常に精密な絵でタイ・デーン（アカタイ族)、タイ族といってもタイランドではなく中国の雲南省にいるタイ族からくるものです。今でも中国の雲南省のタイ族にはラオス語の言葉が通じます。



ラオスでは絹を使って織ることが多いですが、ナーガ（蛇や竜の文様）の織物が精密ということで、今年（2024）ユネスコの無形文化遺産に登録されました。

ラオスでは、今でも民族衣装を着けることが多いです。政府もラオスの織物を強調していて、女性は仕事へ行くときには、必ずシン[i]をはかなければいけません。ズボンだと省庁に入れてもらえません。

しかし、遊びに行くときはジーンズや、この頃は暑いのでお休みの日や夜は日本やアメリカのように開放的な服装が多いです。ラオスでは、肩をだす正装があります。踊りをするときや、結婚式では長袖を着て、(2－300 人の）披露宴パーティーでは、イブニングドレスとして肩をだす着方があります。

3　生い立ち

私はラオスに生まれました。私の父はラオスの植民地時代に小学校しか出ていませんでした。しかし、フランス語ができたので、独学でよく勉強し、土木技術士として仕事をしていました。家にフランス語、タイ語の本がたくさんありました。

母は小さいとき田舎で育てられました。看護師になるつもりでした。母は中学校に入るときに町に出てきてヴィエンチャンにいる祖母と暮らすことになりました。

私たちは 6 人兄弟です。男 3 人、女 3 人です。フランスの植民地は終わっていましたが、良い教育を受けるにはフランス語ができないといけないので、小学校はフランス語で教える学校に行きました。1973 年高校を卒業した後、1974 年に日本に留学する前に、ラオス王立航空会社に 1 年就職しました。

4　お茶大での生活

日本には文部省（現在文科省）の奨学金で日本語を専攻するために来ました。来日していろいろな情報に触れたことで、ラオスの教育を良くすることが必要と気付き、教育学を勉強したいと考えるようになりました。そこで永井文部大臣に「自分たちの国のために教育や経済を勉強したいので専攻を変えさせてください」と他の国からの奨学生とともに手紙でお願いしました。それまで専攻の変更はできなかったのですが、永井文部大臣は留学の経験もあり、アジア系のお友達もいらっしゃり事情を分かっていらしたので許可してくださいました。それ以来、国費留学生はある制限の中で選考を変更することが出来るようになりました。

大学で教育学を学ぶためには奈良女子大学、東京学芸大学も候補でした。東京に残りたくて、教育行政をやるならお茶大しかないということでお茶大を選ばせていただきました。お茶大の面接の際、日本語を一年しか勉強していないのでどきどきしましたが、「国のために文部大臣になります」と言って入れていただけました。ただし寮に入ってもっと日本語が上手になることが条件でした。

大山寮には、個室のシャワー室がありませんでした。それまで人前で裸になったことがなかったので、それが大きな心配でした。みんながお風呂に入る前や、みんなが入り終わったあと夜遅くにお風呂に入っていました。恥ずかしかったけれどだんだんと銭湯にも行けるようになりました。お風呂の文化を学ぶことで、子供と一緒にお風呂に入っていろいろな話ができるようになっ

たことは、私にとって良い勉強になったと思います。

昔は携帯電話がなかったので、大山寮では大使館でも、友達からでも寮の電話にかかってきます。「チャンタソンさんお電話でーす！」で呼び出され、恥ずかしかったけれどそのお陰で顔は見たことがないが名前だけは知っているといわれたことがあります。大山寮では先輩たちと一緒に歌ったり、私は料理が好きだったので、留学生の先輩・後輩や同室の人たちに作りました。文化交流ということで、寮祭や大学祭でお料理を作って販売したりすることもしました。

5　日本での仕事

外務省での仕事を一番長くやりました。ユネスコアジア文化センターでは、図書室で外国語の本の分類などの仕事で１年間働きました。そこで出会った方々が、「教育をどうやって発展途上国に普及させるか、どうやったらよい教材にできるか」を目の前で話し合っていて、このような世界もあるのだと思いました。

私は若い人達を教育したい、日本に来る若い人にいろいろなことを伝えられる通訳の仕事をしたいと思ったので、外務省研修所のラオス語講師をやめ、大学の非常勤講師の仕事もやめてフリーの通訳となりました。若い人達といると気持ちが若々しくなれるので、もっぱら外務省、JICA、JICE や TV 局などの通訳の仕事をさせていただいています。

私は小学校のときにフランス語で勉強しました。ラオス語は家で家族と話すだけで、読み書きはできませんでした。中学校になりラオス語の読み書きができない私とラオスの学校から来た人達が一緒になって勉強するクラスに入り、ラオス語の点数がビリになってしまいました。そこで校長先生に、「私たちにラオス語を ABC から教えてください」とお願いしました。校長先生がクラスを編成してくださり、１年間勉強をしたらラオス語をマスターでき、みんなと３年生から一緒に勉強できるようになりました。

日本にきてラオス語がどんなに自分を助けてくれたかと思います。もし当時、フランス語ができるからラオス語ができなくても良いと思っていたら今日の私はありませんでした。大学１年、２年のときにフランス語を日本語に翻訳することが非常に勉強になりました。お茶大では、フランス語と教育学を勉強したことが私の将来の活路のもとになりました。

「ラオスの布を楽しむ」（アートダイジェスト　2006 年）という写真を多く取り入れたラオスの民族衣装について書いた本を作りました。お料理の本も、ラオス語の本も共著で作りました。

翻訳の仕事もさせていただきました。「ラオスの植物の特許を取るための写真の撮り方のマニュアル」という本を翻訳してラオス側に渡したところ。「ラオス語は不適切なところあったら直させます」と言われ、先方から OK がでるまで心配しました。翻訳は簡単な言葉ほど難しいのです。よく「子どもの絵本だから簡単でしょう」と言われますが、音の翻訳などラオス語にはない言葉があるのでかえって難しいです。宮沢賢治の話は難しく、いろいろな国へ持って歩いていて、なかなか翻訳が終わりませんでした。つい最近は松下幸之助の本を翻訳させていただきました。自分で読んで感動して翻訳したいと思いました。ところが、それが絶版になってしまい、違う本を渡されましたが、いくら読んでも翻訳の言葉が出てきませんでした。３年くらい翻訳のために持ち歩いていたこともありました。

6　日本からの学び

日本人とラオス人のふれあいの中で、どうしたら外国人に自分の文化を理解してもらえるかについて多くの学びがありました。結婚して日本人の閉ざした社会のことも学びました。こちらは勉強したいけれど、お姑さんに「お手伝いしなくていいよ」と言われて、自分の台所に入らなくてよいと言われたような気がしてショックでした。そのあと私が日本の料理や文化を本当に勉強したいのだということがわかってくれいろいろと教えてくれるようになりました。

文部省から奨学金を修士課程まで受けました。そのあとの博士課程には、東急とロータリーから奨学金を得られることになりましたが、多くの人に会って話す機会の多いロータリーを選びました。ロータリーのホストクラブは銀座だったので、毎月さまざまな経営者に会い多くの話を聞くことで経営の仕方を学ばせていただきました。

日本の着物は特別なもので毎日着ません。なぜかというと値段が高いし、着方が難しいからです。ラオスでも伝統の服を着なくないという若い人たちがいるので、だんだんに織物は消えていくでしょうと思い、ラオスの織物の文化を保存する事に気づきました。

7　ホアイホン職業訓練センター設立

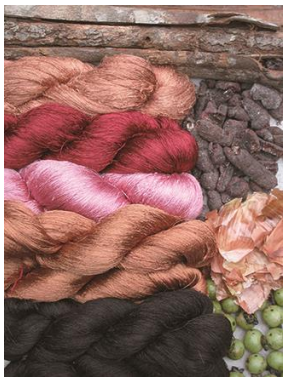
ラオスには色々な民族がいて、それぞれの文様や織り方があるので、ラオスの多様な伝統の織物を守り、新しいものを開発するために 1998 年に職業訓練センターを作り始めました。ラオスの織物を日本で販売した資金を元手に始めることができました。

1992～3 年頃雑誌「銀花」にラオスの織物のことを載せてもらい、銀花のギャラリーで展示会をやらせていただきました。一週間で 300 万の売り上げがあり、孤児院のお手洗いの建設支援や女の子たちに織物研修をさせる資金としました。1997 年に横浜のシルク博物館で 1 カ月間、古いものと新しいものを展示させていただき販売もしました。1 カ月で 1,000 万の売り上げがあり驚きました。それがピークでした。

シルク博物館の売り上げは、ラオスの女性の汗の結晶ですので、それを使って女性のための職業訓練センターを作りました。ちょうどそのころ、JICA からも女性と障碍者の自立支援の枠の支援金をいただき、研修棟、生産棟、寮の建物を作り、3 年間研修の実施を支援していただきました。

その後どこからも支援金がないので、センターの運営費を稼ぐためには、織物を作ったら販売しないといけません。ラオスだけだとそれほどたくさん販売できないので日本で販売することにしてたくさんの展示会をやらせていただきました。

ラオスではできるだけ伝統的な草木染をしています。私が着ているのは藍染ですが、マリーゴールドで染めたり、自然の素材を使い100%を目指してやっています。時々日本のお坊さんの着物用に真っ黒にしてほしいといわれます。化学染料でないと真っ黒にはならないとお話をするのですが、それでも是非と言われるので、黒檀と藍を掛け合わせて黒に一番近い色を作っています。写真の右上はラック（紫鉱)、真ん中の玉ねぎの皮染は日本から教わった新しいものです。下の方は黒檀の実です。発酵させて日本の柿渋のようなもので、それを鉄焙煎すれば真っ黒になります。黒檀は黒と赤黒檀があります。さまざまな使い分けをしています。



ラオスでは簡単な織機で織物を織っています。

職業訓練センターでは観光スポットとして、観光客の一日体験（染色だけの場合や染色と織物）をすることができます。日本、フランスやアメリカから長期で織物の勉強をする人もいます。

ラオスには本があまりないといいましたが、もちろん勉強する教科書はありますが、織物の本もほとんどありません。昔はどうしていたかというと、自分の家の文様をかやの飾りに織り込んで、お嫁さんに行く娘に持たせました。これがあれば家の文様を再現できます。ラオス人はきれいな模様をみたらコンピューターのように家に帰ってすぐに文様を再現し織ることができます。

複雑な模様でもセンターの女性が布をみればすぐに織ることができます。同じ模様がない場合には、文様を再現するのは大変です。日本の様にパンチカードがあれば簡単ですが、複雑な模様

を手で織っているので時間がかかります。何カ月も掛かるものもあります。

右の写真は裏から織っています。掬い織で、糸をひとつひとつ縦糸の間にいれてとんとんとやるので時間がかかります。一日 10 センチも織れないくらいです。これがラオスの伝統的な織物です。

左の写真は、タームックを織っています。タームックは 3 ディメンション織と言われ、もっとも難しい織り方です。

8　学校図書室

ラオスの学校のほとんどには図書室がありません。色々な分野の NGO の支援で一部の学校に図書室ができますが、一般的にはうまく運用されていません。

ですから、“ラオスのこども”が学校に図書室を作るときは、必ず先生に研修を行っています。そうしないと、本を保管したまま鍵をかけてしまい、本がシロアリに食べられるかねずみの巣になってしまいます。そうならないために、必ず先生に、授業の中での本の使い方の研修を行い、子ども達にも研究発表会をさせるなどを行っています。

9　学校設立

2015 年に学校[ii]をラオスのヴィエンチャンに設立しました。1992 年に日本青年会議所から賞をいただき副賞を学校の土地の購入費用の一部としました。1990 年代に学校を作りたかったのですが、なかなか資金がなくて、職業訓練センターが先にできました。小さい学校ですが、開校式にラオスの文部大臣が出席していただき、在ラオス日本大使や JICA ラオス事務所所長や色々な専門家の方々や日本の色々な大学や小学校との交流を行っています。

10　支援のお願い

いろいろな民族のさまざまな織物をご紹介しました。

皆さんの中でもし支援したいと思われる方がいて、図書館がいいなと思えば絵本を送る活動[iii]もあります。織物は自宅でパーティーを開いてお友達を呼んで販売してもいいよという方がいらっしゃれば送ります。そのような協力のしかたもあります。もし、良いギャラリーを紹介してくだされば、私が販売しに行くということもできます。

また、NPO 法人「ラオスのこども」の会のサポーターになることもできるし、本の出版の費

用を寄付することや図書室を学校に寄付する、学校に本をセットにして寄付の方法もあります。

学校は小さい私立学校でインターナショナルとまでいきませんが、保育園から小学校まで日本語と英語を教えています。学費を少しいただいてなんとか先生の給料を払えるようになっています。

ただ「ラオスのこども」は、あくまで日本の方からのご寄付で活動させていただいています。皆さんがラオスのことを少し考えてお手伝いしていただけると嬉しいです。どうもありがとうございました。

---

[i]女性用巻きスカート

[ii] ラオスのヴィエンチャン郊外にて、私立ホアンカオ（稲穂）学校（保育園・幼稚園と小学校）を建設し、運営しています。

[iii]ラオス語絵本プロジェクト

子供に読み聞かせた本が家に眠っていたら、ラオス語の翻訳シールのセット（250 円/冊+送料）があるので、日本語の書かれているところに切って糊で貼りラオスのこどもに送るという活動です。ラオスには本屋さんも少ないので、学校を出ると本を読む機会がなくて字を忘れてしまうということもあるそうです。自分の子供が読んだ本を、もう一度ラオスで役立てられるボランティアです。